

2019
秀作

第52回「おかねの作文」コンクール

お金の大切さ

千葉県・いすみ市立大原中学校 3年 日高 彰太

もし100万円あったら何に使うか。みなさんも人生で一度は考えたことがあるのではないだろうか。僕も時々考える。今までの僕なら野球の道具を買い替えたり、旅行をするなどと安易に考えていた。働いてお金を稼ぐということがどれほど大変なのかこの時までは知らなかったからだ。しかし、今年の夏、僕のこの考え方は大きく変わった。

僕の家族は自営業として漁師をしている。夏休みは毎年、僕も朝早く起きて海老網の“手取り”を手伝いに行く。父や兄が海から揚げてきた網に付いたゴミを取り、綺麗に手取り直すというものである。幼い頃から手伝うことが当たり前だったため、仕事に直結しているという考え方や責任感などは特になかった。そんな中、中学3年生になった今年、父や兄と船に乗り、網を揚げる仕事を手伝うという初の試みをした。午前1時半。僕は、父に起こされた。まだ、外は暗く、こんなに早い時間に毎日起きていることに驚かされた。港に着くまでの車の中、普段手伝いに行く時にはない緊張を感じていたのをよく覚えている。そして、船に乗り網を揚げる場所まで向かった。その間は、緊張していたからか、何を考えていたかあまり覚えていない。普段家で話す雰囲気と違う父や兄の姿があったからかもしれない。到着して、まず父と兄が網を揚げる。僕は揚げた網にかかった海老を外していく。海老を外すという単純作業であるが、とても難しい。外す時に角が折れてしまったり、脚がとれてしまったりすると価値が下がってしまう。しかし、だからと言って、時間をかけて外してしまえば、鮮度が落ちてしまう。揺れる船の上でいかに素早くかつ、丁寧に行えるかが、肝心であるということが理解できた。続いて、父や兄に補助してもらいながら、網を揚げる作業も実際にしてみた。暗い海の上で細心の注意を払いながら行うこの作業は、想像以上の体力と気力が必要であった。初めのうちは、なかなか力を入れるタイミングがわからなかった。揚げた網にかかった海老を傷付けず

にカゴの外に出せるかなど、とても難しかった。しかし、父にアドバイスをもらいながら、揚げていくうちに、少しずつできるようになる。この感覚に最後の網を揚げる頃には楽しさも感じた。それだけでなく、自然と達成感もでてきた。この時に、今までは触れることのできなかった仕事の本質が少しわかったような気がした。港に戻り、いつも通り“網手取り”を手伝った。家に着く頃には、いつもの倍以上、精神的にも肉体的にも疲労を感じた。しかし、ただ疲れただけではなく、今日の僕は、言葉には表せない感情を持った。

今回、僕が学んだことは二つある。一つ目は、お金を稼ぐということには、責任感が生じるということだ。陸^{おか}での網を手取る仕事を手伝うだけでは、就職するまで気付くことはできなかつただろう。父や兄の行動一つで、家族の生活に大きく関わってくる。この責任感を活^いかしていきたい。二つ目は、お金を稼ぐことは、時間を要するという事だ。近年、インターネットの普及により、スマートフォン一つでお金を稼ぐことができる。簡単に見え、正直羨ましくも感じる。しかし、僕はボタン一つでお金を稼ぐよりも、父や兄のように労力や時間を使い、稼ぐお金にこそ、価値があると思う。漁師という職業は、毎日、海老がとれるわけではないし、時には、赤字が続くこともある。また、天候に左右され、働くことができない日が続くこともある。早い時間に起床し、昼過ぎまで働く、労力と時間を要することこそが、お金を稼ぐという本来の姿ではないかと思った。

冒頭に話したように「もし100万円あったら何に使うか。」であるが、今の僕は、初めのような考えはしないだろう。なぜなら、お金を稼ぐということがどれだけ大変であるかということを知ったからだ。父や兄の姿を間近で見ることで、今年の夏、僕は働いて稼いだお金がどれ程大事であるか理解することができた。少なくとも、今は、もし100万円があったら、本当に必要なものにお金を使う選択をすることができる。そして、その考え方は、これから先、生きていく上で、重要になってくる。僕は、中学3年生の今、この経験ができたことは、とても大きいと感じる。今後、高校に進学をしていく上で、勉学に励み、部活動も頑張っていくことで、僕なりに、学んだことを家族に行動で示していきたい。つまり、働いてそのお金で進学ができていることに感謝し、1分1秒も無駄にせず頑張りたいということだ。

「兄ちゃん、受験が終わったらまた父さんと兄ちゃんと船に乗って手伝うよ。
そうしたら兄ちゃんが進路決めた時の話、聞かせてよ。」
兄に声をかけると、日に焼けた顔で僕をからかうようにニヤツとした。

